南蛮屏風の変遷

成澤　勝嗣（早稲田大学、日本）

南蛮屏風という画題は、日本へやって来る南蛮船と南蛮人を描いた風俗画です。大変数多く作られましたけど、その中で、「聖から俗へ」という主題の転換が行われていったという変遷を、これから見ていきたいと思います。

1、狩野内膳筆　南蛮屏風　６曲１双　神戸市立博物館蔵

まずは南蛮屏風の古い作例から。狩野内膳（1570～1616）という、狩野派の弟子筋の画家が描いた屏風です。この作品は、1597 年から 1616 年の間に制作年代を設定しています。1597 年というのは、左隻の左下に描かれているアジア象が、スペインの使節から豊臣秀吉に贈られた年。1616 年は、狩野内膳が亡くなった年です。ですから、成立期の古い南蛮屏風と考えられます。

まずは右隻、日本へ上陸する南蛮人たちを描いています。左隅には南蛮船がありまして、帆をたたんでいます。「カピタン・モールの行列と荷揚げ」は、その右側に続く部分です。先頭がカピタン・モールです。その右上に南蛮寺、つまりキリスト教の教会堂がありまして、その手前、下のように見えますけど手前です。そこに唐物屋という輸入品ショップが並んでいる。その隣に輸入されたアラビア馬が描かれている。

この作品では、右隻の中心的なモチーフはカピタン・モールの行列です。堂々と行進をしている。右下に描かれている唐物屋には、いろんな輸入品が描かれています。唐物屋は三軒並んでおりまして、そのうち、これが中央の店です。中国製とみられる反物が並んでいますが、どうもこちらはインド更紗のようですね。染付や色絵の焼物もある。これらが東南アジア製か中国製かは、絵からだけでは区別がつきませんけれども、唐物として日本で珍重された陶磁器が、彷彿とされるように描かれています。

こちらが右側の唐物屋です。やはり陶磁器が数多く描かれていまして、やはり色絵の茶碗があって、中国製あるいは紅安南と呼ばれたベトナム製の陶磁器かと思われます。お店の左隅には象の形をした燭台（しょくだい）があります。今現存する工芸品の中で適当な作例を見つけられませんでしたので、スライドに投影したのはクメール（カンボジア）の、13 世紀頃のもっと古い作例ですけれども、タイ、カンボジア、ベトナムなど、現実に象のいる東南アジア地域で作られた焼物ではなかろうか。ですから、南蛮貿易の輸入品が、大体中国、東南アジア、インドあたりまでの商品を主体としていたことが分かります。

続いて一番左端の唐物屋の内部です。左端にちらっと豹の毛皮、そして虎の毛皮。しかし、その右側の物体が一体何なのか、長らく分かりませんでした。スライドでは「？？」としています。その右が孔雀の羽根、そして、南蛮の帽子は、織田信長がもらって喜んでかぶったことでも知られています。この謎の物体、画面上ではかなり小さなモチーフですので大体見落としてしまうわけですけれども、グレーとホワイトで、何かぶつぶつがある。胡粉の盛り上げで点々を表していまして、ある日突然気がついた。「あ、これは鮫皮だ」と。鮫といいましても実はエイですね。南シナ海で捕れるエイの皮でありまして、スライドのように、日本刀の柄の滑り止めに使われます。漆工芸品の装飾などにも用いられます。ですから、これも東南アジアから輸入されてくる物体であった。スライドは江戸時代の輸入された鮫皮ですが、目の部分にエイの原形をとどめています。

続いて、キリスト教の聖なるモチーフです。右隻の右上に描かれる南蛮寺には、奥の書斎と、手前の儀式を行なう部屋と、二つの室内が描かれています。手前の部屋には祭壇が設けられていて、十字架と救世主の像があります。司祭が祭壇に聖体、この黄金の丸い物体はおそらく聖体のつもりでしょう、を捧げる場面です。この場面は、先ほど入港した南蛮船が聖体を運んできたと見ることもできます。

また俗なモチーフに戻ります。先ほど述べましたように、右隻には 2 頭の馬が描かれております。これも、ただ見ているだけでは、「ああ、馬だな」と思うだけですけれども、実は飾り立てたアラビア種の馬、輸入さ

れた馬ですね。当時の日本の一般の馬というのはモンゴル種です。ですから、体は小さく脚も短くて、ずんぐりむっくりしていて、日本の武将たちはそれで合戦をやっていたわけです。ですから、こういった体格が大きくて優れたアラビア種の馬というのは、武将たちにとっては垂涎の的となったことでしょう。それが実際に日本へやって来た記録がありまして、1591 年、イエズス会巡察師ヴァリニャーノをインド副王使節とする南蛮人の一行が、京都の聚楽第で豊臣秀吉に謁見した。そのとき、使節からアラビア馬を秀吉にプレゼントしたことが『イエズス会日本報告集』に書かれています。

続いて、屏風の左隻です。こちらは異国の風景で、どことも分からない外国の港を南蛮の黒船が帆をあげて出発していきます。見送りの南蛮人たちがいて、背後に奇妙な外国建築が二つ並んでいます。手前にはグレイハウンド、これも輸入された狩猟用の洋犬です。横では、パランキンという担ぎ輿に老人が乗っている。その左側にアジア象が描かれています。

スライドは、右隻にも登場していた西洋の犬です。これも、最初のうちは、こんな虎のような縞模様を持つ犬が、はたしているのかどうか疑問でしたが、以前オランダへ行ったとき、こんな犬が公園で目の前を通りまして、「本当にいるんだ」と思って『犬の写真図鑑』を調べてみたところ、こういう虎縞のグレイハウンドがいるそうです。特徴としては、しっぽが垂れ下がっている、両耳が後方についている。絵と実物では若干足の長さが違いますが、これは写しくずれでしょう。グレイハウンドは狩猟用の犬ですので、やはり大名や武将の狩猟、つまり軍事訓練のために重宝されたものと思います。

左側の建築の上端を見ます。柱は雲龍の模様ですから、これは東洋的なモチーフですが、その内部にモンストランス（聖体顕示台）を、屋根の先端に誇示するように描いている。内膳がどこかの教会でキリスト教の祭具を実見して、異国建築の装飾物として転用したのではないでしょうか。内膳のアイデアかと思われます。また、右側の建物はドーム型になっております。このドーム型の建築というのは、日本でいえば八角円堂というような仏殿がありますけれども、内膳と近い時代、八角形のフロアは安土城で見ることができた。織田信長が建てた安土城の天主閣の上から 2 層目（6 重目）は八角形になっていたことが、文献上の記録から裏付けられる。それを信長の記憶装置として、画家が転用したのではなかろうかと思われます。

その手前にパランキン、「担ぎ輿」と訳していますけれども、これに乗った老人がおります。側面に唐獅子、ライオンの装飾がありますので、そこは東洋的です。左のスライドはリンスホーテンの『東方案内記』に載っている、東洋で使われるパランキンです。このパランキンは、やはり 1591 年。先ほど述べた、秀吉がアラビア馬をもらったのと同じとき、イエズス会巡察士ヴァリニャーノから豊臣秀吉に対して贈られたという記録があります。ただ、このパランキン自体は中国製でした。それは『イエズス会日本報告集』に、中国で特別に作られたパランキンを秀吉に贈ったとあることから裏付けられます。その後、秀吉はこれが大層気に入って、あちこち出かけるとき、このパランキンに乗って行ったということです（『晴豊記』）。アラビア馬と同様に乗り物ですね。乗り物がやはり権威の、王権の象徴になるというのは大変わかりやすい。他人の乗れない特別な乗り物に乗るのが王様、という感じでしょうか。

次は、パランキンの左側に描かれたアジア象です。日本にはいない象を、内膳は写実的に描いている。これは 1597 年に、マニラから来たスペインの使節が、秀吉にアジア象を献上します。それを秀吉が息子の秀頼、まだ少年だった秀頼と一緒に大坂城で見たという記録が、アビラ・ヒロンの『日本王国記』の中に出てきます。秀吉が大層喜んで、「さて、さて、さて」と言って拍手をしたと記されております。狩野内膳は、実は豊臣秀吉のお抱え絵師です。ですから、大坂城で秀吉に従って象を見た写生を、この屏風の中に取り入れたのではないかと想像できます。象の体だけに写生的な陰影が付けられて、さらに、その前後にいる象使いが、鳶口、つまり鈎のついた調教道具を持っています。これは現在でも動物園に行きますと、象の調教師はジュラルミン製の同じ形のものを使っております。

続いて、その背後に描かれている建物の内部です。象を見る家族がいます。お母さん、お父さんと息子、息子は少年ですね。これは聖家族ではなかろうかと考えられます。キリスト教の銅版画からヒントを得て、内膳が描き込んだものではなかろうか。

これまでのことを考えますと、象を見ている親子。先ほど言いましたように、大坂城で秀吉は息子の秀頼と

ともに象を見た。あるいは聚楽第でヴァリニャーノからもらったパランキンも出てくる。ですから、こういう舞台設定を見れば当時の鑑賞者は、「あ、これは秀吉の栄華を描いたものだ」ということが連想できたのではなかろうか。秀吉は晩年、朝鮮半島に攻め入り、その後は中国を征服して「最後は南蛮の王になるのだ」というようなことを言っていたといいます。そうしますと左隻、外国風景にちりばめられた秀吉らしき老人の姿は、秀吉の見果てぬ夢を視覚化して記録してあげるために、狩野内膳が考案した可能性が高いのではないかと思います。

2、南蛮人来朝之図屏風　６曲１双のうち　長崎歴史文化博物館蔵

内膳のように、聖と俗を交えて異国趣味を醸し出すのが初期の南蛮屏風ですが、1610 年代頃から、徳川幕府によるキリスト教禁令が厳しくなってくると、南蛮屏風のモチーフが変化してきます。これは 1620 年代頃かと推定される、長崎歴史文化博物館にある南蛮屏風。所蔵先では、「南蛮人来朝之図屏風」と呼んでいます。スライドに出しておりますのは右隻だけですが、左隻には、入港する南蛮の黒船が大きく描かれます。こちら、右隻では日本へ上陸したカピタンの行列と、アラビア馬もおります。画面の右上に描かれている建物が南蛮寺、教会ということになります。ただ、この教会堂を見てみますと、礼拝などキリスト教の儀式は全く描かれておりません。それよりも、左端の望楼で俗人の南蛮人が休息をしています。そこに向かって、黒い服の宣教師たちが、何やらお皿を捧げ持って接待に行く様子です。南蛮寺が、来日した世俗の南蛮商人たちのゲストハウスのように変貌したと見られます。

3、南蛮人遊楽図屏風　６曲１隻　太平洋セメント(株)蔵　津久見市寄託

この作品はさらに変化が進んでいて、寛永期、1630 年ぐらいでしょうか。もうちょっと下がって 1640 年頃かもしれません。すでに時代は狩野探幽が作り上げた江戸狩野の様式が支配的になってきます。この作品も、やはり狩野探幽ふうの画風が、松とか人物の描き方に見られます。

ここでは、南蛮船が白い船に変わります。ただしこれは片方しか残っていないので、ひょっとしたら、失われた左隻に黒い南蛮船が描いてあった可能性もあります。ただ、荷揚げをしているのは白船、すなわち中国船（唐船）のイメージでありまして、南蛮人のみに限らず、中国の服を着た人、タタール――韃靼（だったん）の狩猟ふうの服を着た人がいる。これは当時、明から清へ王朝が交代する時期ですので、日本人のイメージの中には、中国人には 2 種類あって、明朝人と清朝人は別の民族という認識があったらしく、清朝が成立したときには、あれは韃靼人の征服王朝（実際には女真族）であるという報告が江戸幕府に届いています（『通航一覧』）。ですから、中国の王朝を 2 種類描き分けているのかもしれません。さらにこの荷揚げの場面ですが、荷揚げのみならず積み込み、つまり輸入と輸出が両方描かれている。外国から入ってくるばかりであった南蛮屏風の中に、日本から外国へ輸出するというイメージが加わりました。

中央の日傘を差し掛けられて馬に乗っている人物は、明朝人の服装をしています。また南蛮人（あるいはオランダ人？）の踊りを日本人が見物する、あるいは荷物を積み込むというような、さまざまな交易や、外国人との交歓という、過去の南蛮屏風になかったバリエーションが登場しており、日本の側からすると、外国との貿易による財福、商売繁盛という願いを込めたものに変貌していった。ですからキリスト教モチーフを排除して、国際貿易によるおめでたい世俗のテーマのみに絞ったように見えます。

実は、この画面の中にもカピタンが登場します。上のほう、隅っこで所在なさげに、さみしい行進を行なっているカピタン・モールが最後まで残されました。この作品になると、南蛮屏風と呼ぶよりも、交易にテーマを絞っていますので「南蛮人交易図」と、また別の名前を付けて呼んだ方がよいかもしれません。発表は以上です。ありがとうございました。

註：各屏風の詳細な図様は、坂本満ほか編『南蛮屏風集成』（中央公論美術出版、2008）でご確認ください。